

関東の石舞台

これまで紹介してきたように、市内では5世紀末〜6世紀にかけて埼玉古墳群を中心に大型の前方後円墳が次々と築かれ、古墳には多数の埴輪がたてられました。

7世紀になると、突如として埴輪は全くたてられなくなり、前方後円墳も築かれなくなり。そして古墳は小型化していき。こうした変化は関東各地でほぼ共通しており、6世紀末ごろ以降国家体制が整えられた中で、何らかの政治的規制がされるようになったのではないかと推測されています。

ところが、古墳が小型化して行く7世紀前半に、直径80メートルの抜きんでて大きな円墳が藤原町の若小玉古墳群に築かれます。それが八幡山古墳です。八幡山古墳は、推定全長16.7メートルの巨大な横穴式石室を持つ円墳です。昭和9年(1934)に墳丘が崩され、飛鳥の石舞台古墳(奈良県)のように巨大な石室が露出していることから「関東の石舞台」とも呼ばれています。



八幡山古墳石室

この八幡山古墳の石室には、榛名山麓の角閃石安山岩、荒川上流域の緑泥片岩、比企丘陵地域の砂質凝灰岩など広範囲に渡る複数の地域の石材が豊富に使用されており、八幡山古墳はそれら広範囲から石材を調達できる権力者の墓と考えられています。そして、その有力候補とされているのが、平安時代に記された「聖徳太子伝暦」に登場する聖徳太子の側近物部連兄麿です。兄麿は太子の影響を受け、社会道徳を守って修行を積み、出家しない仏教信者の優婆塞となります。そして永年の功績が認められ、舒明天皇5年(633)に武蔵国造となり、後に小仁の位を賜ったとのこと。

八幡山古墳は寺院建築の基礎固めの技法である版築で墳丘が築かれ、新しい石組の技術を用いた巨大な石室が構築されています。石室からは仏具の銅鏡、畿内の貴人が用いた漆塗りの棺などが出土しています。

後世の伝記である「聖徳太子伝暦」には疑問も持たれていますが、八幡山古墳は兄麿の墓にふさわしい、畿内政権との関わりがうかがえる、当時の先端技術と仏教文化が取り入れられた古墳なのです。

(文化財保護課 中島洋一)

このコーナーでは、行田の歴史や名所、名物などを行田ゼリーフライキャラクターのこぜにちゃんが分かりやすく紹介します。



こぜにちゃんが行く!

まき てい しゃ
牧 禎 舎

忍地区にある牧禎舎は、昭和15年に創業し、足袋や被服販売を行っていた牧禎商店の住宅と工場で、平成22年に藍染め体験ができる工房を開設したんだ。

そして、今年の3月、牧禎舎はリニューアルし、住宅や工場を「アーティストシェアハウス」として、工芸などを行っている人たちへの貸し出しを開始。アートや工芸の情報発信拠点として話題になっているんだ。藍染め体験はもちろん、定期的にイベントを開催しているから、ぜひみんなで遊びに来てくださいね。

今月の表紙

8月17日、行田軽トラ朝市「収穫体験ツアー」が行われ、軽トラ朝市に出店している生産者の梨園や畑を訪れました。

参加者は、生産者から収穫方法や生産者ならではのおいしい食べ方などを教えてもらった後、茄子や梨を楽しみ収穫し、とても満足そうな表情を浮かべていました。

■市報ぎょうだに掲載されているあなたの写真を差し上げます。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当(内線318)まで。

■市民の皆さんの市政に対するご意見をお待ちしています。

■市報をCD-Rに録音したものを希望者宅にお届けします。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当(内線318)までご連絡ください。



市報ぎょうだは再生紙を使用しています